

東・中近東諸国での技術指導・講演

外国食品工場 状況調査と指導に携って

(48)

オマーンについて①

(技術士農業及び経営工学部門)
佐藤 正 忠

昨年末から本年六月にかけてオマーンに行くことになった。

オマーンも中東にあるイスラム国家の一つであるが、王制をしており国情は安定している。現在の王様はカブース・ビン・サイド・アル・サイド国王といひ、昨年で現国王になって三五周年の記念があった。カブース王はオマーン南部の都市サララ出身で二応長年にわたる内乱を平定し統一国家とした父のサイド・ビン・タイムール王の崩御後、国王の地位につ

は時間を要した。日本大使館からの大使も通産省出身の方で理解もあり、書記官の方々にもかなり御尽力を願った次第である。

位置的に見るとオマーンは南緯二六・一七度、東経五三・六〇度の南北に長い国である。主なる都市は国の北東部にある首都マスカット(一説によるとマスカットがどうの名称はここから来たと言われるが、現在マスカット周辺にはぶどうは全く見られない)、やや西へ行つたソハール、前述した南のサララ・スールくらいで国の中心部は大部分砂漠で、マスカットとスールの間にあるワヒバ砂漠のスケールはかなりの大きい。後で二二へ4WDの車で行った際の話も出て来ると思うが、いざとなつた時のため車は二台で行き、井当と水を持参で出かけたものである。石油資源はこの国で

マスカットや近くの国際空港のあるシーブ(車で約四〇分)や工業団地のあるルセルの北側はオマーン湾をばさんでイラン(この国へも一年前に訪問したが、同じイスラム国家でも格段の差があり、ラマタン以外ならオマーンは大抵どこでも酒が飲めるのにイランでは公には全く酒を飲む所がないのが最大の違いと言える)がある。オマーンの西北にムサンダム半島があり、これは飛地でありムサンダム半島の南にはアラブ首長国連邦のドバイやアブダビがある。東側はアラビア海をばさんで約千km離れてインドがある。国の南側にはイエメンがある。

オマーンは歴史的には古くソハールやスールの港からは昔シンドパッドが船出したとの伝説があり、現在もスールには木造船を造っている造船所がある。これらの船でマ

グロ等を取り、水辺でゼリを行つて氷詰め箱入りで国内各地へ運搬している。冷凍車も僅かではあるが動いているが、余程遠隔地へ運送する場合である。これも後オマーンの工場の所でふれるが、オマーン人は今のところ自ら手の下して工場で働く人は非常に少ない。大体インド人、スリランカ人が多く彼等もこのアラビア海を渡つて来ている。航空機だとインドからも二時間程度で飛んで来れるので早いし便利である。しかし国王のオマニゼーション政策で、これからはオマーン人もどんどん工場で働く人が増えるであろうとの期待が大きい。唯一のカブース・スルタン大学(国立)もあり、この優秀な卒業生は各分野で活躍し始めてはいるものの未だこれら大卒者を吸収する企業も少なく、卒業生の多くは官吏を目指して

るとのこと、どこかの国と似ている感じもある。オマーンではまだまだこの国の産物は少なく果物ではデーツ(ナツメヤシ)、野菜はキュウリ、カボチャ、ウリ類などであるが、魚介類は半分は上海に囲まれていて結構獲れる。しかし加工工場が少なく、大部分が生か冷凍で輸出されるケースが多い。冷凍品も包装設計が不備で遠隔地へ送ると損失が多いと嘆く経営者もいる。しかし近隣の湾岸諸国からオマーンで生産していない原材料もどんどん入つて来るし、食品原料や包装材料や包装機械もヨーロッパから入つて来る。だから食品工場へ行くとはほとんどの輸入機械を使って原料の処理加工から包装までを行っている。自前のものはほとんど無いと言つてもよいくらいである。機械類も日本と異なり自動

機や省力機はない。中国と同様人力でやるべき点はあるのか、どの工場へ行つても作業者はむくつけき男性が多い。製菓会社では女性作業者もいるが、これもインド人である。とにかくオマーン人は金を出して工場は建設するが実際の工場運営はほとんど外国人(それもインドが多い)まかせて、私も三〇カ所以上の工場調査に行つたがオマーン人自ら工場にいたのが二社、他のアラビヤ人が二社、後は全部インド人のゼネラルマネージャーである。インド人のゼネマネが中間管理者、作業者を連れて来て工場を動かしている。中には非常に理屈っぽいゼネマネもあり、哲学者かと冷やかに

てやつた。



外国食品工場の 状況調査と指導に携って

(49)

オマーンについて (2)

(技術士農業及び経営工学部門)
佐藤正忠

第一報でオマーンの地理的なことは書いたが、その他の現状を記載しておく。

面積は二万平方キロメートル(日本の六〇%)、人口はオマーン人が一五〇万人をだし外国人が四五〇万人居住している。首都マスカットが八・五万人、出生率は四六%、死亡率は一三%、但し乳児死亡率は二〇〇%、日本は概かに五割である。第一次産業従業者は五〇%、第二次産業は三二%、国民総生産は九一年で一人当り五八〇〇ギ(日本

人は二万五、〇〇〇ギ、輸出は三八億ギ、輸入は一七・七億ギとなっている。通貨はオマーンリアルといひ一〇・Rは二・六ギで対円も二七〇円くらいである。このレートは固定であり、変わらない。九四年予算では歳入が一七億三二〇〇万ORで、この内石油収入が七六%を占めている。一方歳出は三〇億三三〇〇万ORで対前年度比減にはなっているもの超過している。予算前提となる石油価格も実勢価格は下落しており(一五ギ/一

バーレル)が二・六ギ程度、I.P.E.C議長国たるオマーンは石油価格の立て直しを図るべく担当石油相が諸国を歴訪している。

言葉はアラビア語であるが英語は当然通用し、私たちがほとんど英語で話し合っていた。商士首(M.C.I.)のM女史はエリートで英語、フランス語も出来る美人である。毎日の洋服、靴、頭からかぶる布も取り替えてくる大変おしゃれな人である。私的にも仲良くなりオマーン産の人形を売っ

ている店や特殊な醬油の販売している店を教わったりした。公的な場合もこのM女史に頼めば多少相手の事も時間がかかるが、ほぼ確実に私どもの要望を満たしてくれる有能なカウンタパーであった。

オマーンの主な都市とそこを結ぶ道路は広くて大変気持ちが良い。マスカット市内も大部分は三車線以上でレーンの幅も広い。車はベンツやBMWが多いが日本車もかなり走っている。街中の十字路も車全体が少ないせいで、ロータリー式の所が多い。因みに車の所有者は千人当り九二台であり日本の六〇〇台と桁が違つ。しかも国土は日本の六割、人口も二分の一から見ると車は非常に少ない感じがある。中国やイランのように車は多いが、車優先(?)の国とは異なりドライバーマナーは非常に良

好。横断歩道のない所でも車は停まって通り過ぎさせてくれる。町と町の間の道路では大体一〇〇ギ以上で車は走っているが、他に横断歩道や日本のような歩道橋など無いため、ここを横切る人達がいる。ここらは車に乗っているから良いが、これはかなり危険である。又面白いのは田舎の方にいくとラクダが多いが、時々ラクダが道路を横切ることがある。ラクダにぶつかるとその重量で車がつぶれて死傷事故につながることも言う。たまにラクダに綱を付けて車の窓から引っ張ってラクダの散歩をしているのにもお目にかかる。私はついぞ見なかったが、オマーンにはラクダレースがあるそうで、その練習でもやっているのかと話し合つた。

このように道路は良いのだが一つこれと想つのは排水処理が無いことだ。雨が降ると水は道路の上を流れて当然ながら低きに流れる。従つて道路の交叉するロータリーは水浸しになる。普段はそんなに雨の降ることのない土地柄の故か、雨が降ると「今日はよい天気だ」と言つて喜んでる人達である。しかしオマーンにはワジと呼ばれる水路があり今でも灌溉用になっている。デーンの詳細所には上手に水路が出来ており川の水を供給している。途中では人間用に飲料水や洗濯用に使っている。アラブ諸国で川らしい川のある国はオマーンくらいだと聞く。山の間にワジがあり、これを遡ると次第に細くはなるが、きれいな水がある。4WDの車でこの水を横切つたり水の中を進む。ワジのある近くにはオアシスがあり、デーンが多いが他の樹木も生茂っている。むしろマスカット市内の



岩山を見るのとは大きな違いである。道路側にも三層位の幅で花壇がありここでもスプリングラーで水を注いでいる。また岩山にも滝の様に上から水が流れ落ちていたり、中東独特の素焼きの水冷却用つぼの大形のものにも水が注がれている。一体この国には水が豊富なのか不足なのか、わからなくなつてしまふ。これだけ水があるのなら、もう少し農業用に回し灌溉用水として使用すればもっといろいろな野菜が出来そうなのと思つた。マスカットの北側の海には大規模な海水淡化設備があり稼働していると聞いている。電気は大変安い国であり、それを利用しているのだらうか。道路の街灯もブルの窓からも一晩中煌煌と点灯している。車などハッドライトなしでもよくくわい明るい。しかしこれが山地やベッドウィンの住

んでいる地方へ行くとき、様相は異なる。真暗の中にヘッドライトだけが頼りである。こんな中に黒い頭巾や衣服をまとつた人が出て来たら、たまたまものではないと思つた。車は左ハンドルで道路も日本とは反対向きである。ロータリーでは全部左回り(時計の針と反対)になつていて、慣れないと逆行したり、レーン間違えたりしないか心配である。

ざつとオマーンを概況を書いたが、最近オマーンに関する出版物も少しは日本でも出版されている。ダイヤモンドピグ社の「地球の歩き方シリーズ」にも、アラビヤ半島がありオマーンのことでも詳しく書いてある。これから工場調査について書いていきたい。

外国食品工場の 状況調査と指導に携って

(50)

オマーンについて (3)

(技術士農業及び経営工学部門)
佐藤 正 忠

日本からオマーンへは飛行機はない。私もはいつしタイのバンコク経由でマスカット空港へ行つた。バンコクまではじめの外国機もあるが、それから先はタイ航空かパーレーンに本社があるカルフエアーらしいのである。この間が七時間と割に時間がかり、しかも時差の関係で五時間も一日が長くなるので初日は非常にうら。成田ーバンコクの間は二回、バンコクーマスカット間も二回食事が出る。その間にロビーで中間食

などを食べると大抵、正味一三時間の機内でおまわり運動もしていないので腹がふくらんでしまう。どういふ訳かマスカット空港には夜しか飛行機が到着しない。出発も夜中である。そうかと言つて機内で眠るとホテルに着いてから寝られない。なつてしまふ。カルフエアーのステュワードはアラブ人であるが美人で愛嬌の多いものが多い。そのステュワードと相手は機内雑誌のパスルを教

わたり、たわいのない話をしたり、マッサージなどをする。夜は八時頃から再びオープンする。オマーンの人達もその頃から外に出て来る。従つてレストランも初めは空いていても夜一〇時、一時になると満席になるという面白い現象である。夜半過ぎまで彼等なりに飲食を楽しんでいる。もちろんだらマゲン時は絶対に酒が出ないのは当然である。レストランはやはりインド系、中国系が多い。日本食は私どもの宿泊しているアルファラジホテルにあるのが、オマーン唯一の日本食レストランである。

私は大体何を食べても平気である(ただし辛いのは不可で、注文する前にノン・スパイシー、マイルドとか充分念を押しておかないと)。心でもないことになりかれない。この日本レストランにはそれこそ日本大使館の方も、両社の方々も長期滞在の方々も時々顔を覗かされる。一種の社交場である。私などは昼食が過ぎず消化不十分の時のソバやうどんを食べることが多かった。しかしメニューは沢山あり、寿司や焼き肉、天ぷら、刺身の類は原料も比較的新鮮であり、外国人の姿も多く見かけるレストランである。勿論マネージャーは日本人であり、従業員は男女ともフィリピン系が多く、さまざまに異なる着物を来てソワリを履いた姿は面白い。この日本人マネージャーはオマーン滞在も長く何かと頼りになる人とガイド

ブックに書いてある。またホテルアルファラジには日本人の奥さんでオマーンが大変気に入つたと泊っている人がいる。いろいろ情報をもらう。一人で外出しては自生の野菜や果物を取って来ては見せて下さる。あの時はアロエの大型のもの分ボテン位のサイズのを見せてもらい、これを植えておくと植木鉢まで見せてもらった。どういふ資格で入国されているのかわからないが、時々ヨーロッパへ遊びに行つて、ついでに日本へ帰るといった極めて優雅な生活を送つておられる。元学校の先生かとも聞いたらしいが、よくわからないが不思議な女性である。私も最後に帰る時にはロビー迄送りに来て下さり、大変残念がつておられたが、今も随在であらうとお察しする。

オマーンのレストランは前述のようにインド系と中国系である。しかしよく探すとイタリヤン系や勿論アラブ料理を出す所がある。日本レストラン(ホテル内の一店ののみ)と中国系はどちらか高い。日本にいるとどちらかと言へば中国料理の方が入敷が多ければ安くなるのだが、オマーンでは少し異なる。中国人マネージャーが「他には?」と次々に料理を紹介し、何が原料だとか、調理法はどうかと聞いてくる内に何となく食べたくなり、つい注文してしまつことになるからである。すすめ上手なのかも知れない。インド料理はやはりカレー類。実に種類(肉の違ひ、辛さの違ひなど)が多く選

別に選んで来るので各自適量を取る。まずボールに入っているカレーを少し舌でなめてみて、辛さを試してからでないと危険である。アラブ料理もおいしい。味は大味な感じがするが、食べるムードが楽しい。じょうたんの上に座りビニールシートを敷きこへ皿盛りの御馳走が並ぶ。大皿からはスプーンやフォークで取り皿に取るが、通常は手で食べる。絶対に右手を使い小指以外の指で炒めた御飯を上手にすくい三本指の上から親指で押し出す様に口に入れる。私も真似はしてみたもののうまく行かずスプーンの世話になり同行のオマーンの人には笑われてしまった。魚も手で干切つて混ぜる。

後にも出て来ると思ふが、この国の役人は大抵午後二時以降は仕事をしない。会社や工場の人達は夕方迄仕事をしますが、彼等は彼等は別らしい。彼等は家へ帰つて寝るか、アル

私は大抵何を食べても平気である(ただし辛いのは不可で、注文する前にノン・スパイシー、マイルドとか充分念を押しておかないと)。心でもないことになりかれない。この日本レストランにはそれこそ日本大使館の方も、両社の方々も長期滞在の方々も時々顔を覗かされる。一種の社交場である。私などは昼食が過ぎず消化不十分の時のソバやうどんを食べることが多かった。しかしメニューは沢山あり、寿司や焼き肉、天ぷら、刺身の類は原料も比較的新鮮であり、外国人の姿も多く見かけるレストランである。勿論マネージャーは日本人であり、従業員は男女ともフィリピン系が多く、さまざまに異なる着物を来てソワリを履いた姿は面白い。この日本人マネージャーはオマーン滞在も長く何かと頼りになる人とガイドブックに書いてある。またホテルアルファラジには日本人の奥さんでオマーンが大変気に入つたと泊っている人がいる。いろいろ情報をもらう。一人で外出しては自生の野菜や果物を取って来ては見せて下さる。あの時はアロエの大型のもの分ボテン位のサイズのを見せてもらい、これを植えておくと植木鉢まで見せてもらった。どういふ資格で入国されているのかわからないが、時々ヨーロッパへ遊びに行つて、ついでに日本へ帰るといった極めて優雅な生活を送つておられる。元学校の先生かとも聞いたらしいが、よくわからないが不思議な女性である。私も最後に帰る時にはロビー迄送りに来て下さり、大変残念がつておられたが、今も随在であらうとお察しする。



外国食品工場の 情況調査と指導に携って

(53)

オマーンを知ろう(1)

(技術士農業及び経営工学部門)
佐藤正忠

ここに先にご紹介した、遠藤晴男の著書「オマーンが見えてくる」(サイマル出版会)からのオマーンの一般状況を書いてみよう。

オマーンのカブス国王は年始め恒例の「ミート・ザ・ピープル」行脚をされることは既に書いた。この国は役所関係の建物ばかりでなく、民間会社でも事務所、文閲、管理者の執務室など至るところに国王の写真が掲示されている。我々が集まるの居屋(MIC)も会議室にもある。空港から市内へ通じているきれいな

な道路の中央分離帯に立っている街灯の横にも小さな王様の写真が掲げられている。都立三回、オマーンを訪問したが、私はついぞ王の行列には出会わなかった。

でも著書によれば、王自ら車を運転し(オマーン人はあの長いデスターシャを着てよく運転すると思うが、皆ちゃん運転する)そのドライブマナーも大変良い(各都市を回り、国民と直かに膝を交えて国民の言に耳を傾け、国民の声を政治に反映させるために行っている)事である。この際には顧問大臣も大勢加わる。都市から離れた村々にも国王は行かれるのである。そして国王もこの期間中はロイヤルテントに寝泊りする。テントの他に水、燃料、ガソリン、トイレなどを積んだ車が何十台と続くらしい。したがって行列は数キロにも及ぶ壮大なものになるのである。

一月にはラマダンがある。誰かが新月を見つけると翌日から約一月間行なわれるので、この新月も三日月をもっと細くした頃のもので、とうてい我々の肉眼ではよく判らない。でも新聞にも記事と写真が載り開始される。彼らイスラムの方々には良いが、我々一般外国人にも適用されるのでいささかたまったものではない。第一、酒が飲めない。お天道様の昇っている内は水も食事もとれない。よその会社や役所へ行っても水一杯出ない。私はいつもミネラルウォーターボトルを持っていくが、車の中でも、対向車のいない所で遠慮しながら飲む。しかも運転手の目も気にしながらである。食事も摂れない。しかしホテルの暗い片隅で辛うじて食べることは出来る。食事内容は普段と変わらないが薄暗い所で、しかも余り声を出さずに食べる訳である。その代り夜の八時を過ぎると、街にも人が出てくる。そして夜半まで食べたり、おしゃべりである。しかしアルコール

類は皆無である。我々の夕食も外で食べる事が多いが、アルコールが無いので、ホテルの誰かの部屋でルームサービスを取る。外国人しか買えない酒屋で購入したビールやウィスキー、ワインを飲むのであるが、問題はビールなどの空缶の処理。ビール缶を潰して、ポリ袋に入れるが、大体捨てる所がない。瓶類も一見して酒が入っていたことが判るものも処理が大変。ホテル内の日本レストランのボーイ(大抵フィリピンかタイ人)にチップを渡して廃棄処理してもらうことになる。

この国の人は日の上りていない時に食べる。それも通常の一日分を食べるので、よくあれて肥満にならないと思う。午後などホテルのプールに泳ぎに来たり、トレーニングに来ているが運動は良いことと思いが、よく空腹で出来るなあと感じる。汗もか

くだらうが、その後暗くなるまで水も飲めないのは却って身体に良くないのではないかと案じてしまふ。

アラブの人達はよくデザートとラクタミルクがあるから俺は強いと自慢する。人によってはフカヒレと鰻があるからと付け加える人もいる。オマーンではラクタもいるが、蜂蜜が良いという。甘いものの好きな国民で、中にはバナナに蜂蜜を付けて食べる人もいるという。例の手で食べることを教わったオマーン料理は米は油で炊いており、魚や肉が乗っているが、そんなに甘いと感ぜられなかったが、アラブの人達は強い子孫を残す必要があり、自身も強くならねばとの自負があり(場合によっては四人まで興奮を持ってるので、強くなる食物にはつい真剣になるのだぞうである。

アラブ人との会話では家族何人、兄弟姉妹の数についてが多い。子供二人なんていうと怪訝な顔をする。日本の一族は平均すると三人台だよねという不思議な感じがするらしい。前記のように奥さんを四人持てるので父親の奥さんの数を聞く。MICのA部長の家族もややこしい。一月月違いの弟がいたり、兄弟など全部合わせる二八人とのこと。

兄弟で野球の対抗試合が出来た。強いことが美德であるアラブ世界で、子供を派山作るとは十分尊敬に値するとのこと。一方カブス国王には

類は皆無である。我々の夕食も外で食べる事が多いが、アルコールが無いので、ホテルの誰かの部屋でルームサービスを取る。外国人しか買えない酒屋で購入したビールやウィスキー、ワインを飲むのであるが、問題はビールなどの空缶の処理。ビール缶を潰して、ポリ袋に入れるが、大体捨てる所がない。瓶類も一見して酒が入っていたことが判るものも処理が大変。ホテル内の日本レストランのボーイ(大抵フィリピンかタイ人)にチップを渡して廃棄処理してもらうことになる。

この国の人は日の上りていない時に食べる。それも通常の一日分を食べるので、よくあれて肥満にならないと思う。午後などホテルのプールに泳ぎに来たり、トレーニングに来ているが運動は良いことと思いが、よく空腹で出来るなあと感じる。汗もか

くだらうが、その後暗くなるまで水も飲めないのは却って身体に良くないのではないかと案じてしまふ。

アラブの人達はよくデザートとラクタミルクがあるから俺は強いと自慢する。人によってはフカヒレと鰻があるからと付け加える人もいる。オマーンではラクタもいるが、蜂蜜が良いという。甘いものの好きな国民で、中にはバナナに蜂蜜を付けて食べる人もいるという。例の手で食べることを教わったオマーン料理は米は油で炊いており、魚や肉が乗っているが、そんなに甘いと感ぜられなかったが、アラブの人達は強い子孫を残す必要があり、自身も強くならねばとの自負があり(場合によっては四人まで興奮を持ってるので、強くなる食物にはつい真剣になるのだぞうである。

アラブ人との会話では家族何人、兄弟姉妹の数についてが多い。子供二人なんていうと怪訝な顔をする。日本の一族は平均すると三人台だよねという不思議な感じがするらしい。前記のように奥さんを四人持てるので父親の奥さんの数を聞く。MICのA部長の家族もややこしい。一月月違いの弟がいたり、兄弟など全部合わせる二八人とのこと。

兄弟で野球の対抗試合が出来た。強いことが美德であるアラブ世界で、子供を派山作るとは十分尊敬に値するとのこと。一方カブス国王には

現在子供がいないのと。また五〇歳の国王であるが、やはり先行きは心配である。今は平穩な国であるがほんの三〇年前は各部族間の争いがあったと聞く。たまたまある日の新聞にも四人奥さんが居て、子供が実に三十数名、孫は一〇〇人を超える、しかも自身は未だ強健としていたが、日本始め欧米の国々、中国では本心に考えられない話である。彼等を平均に平等に愛し、取り扱う必要があるから、本人もなかなか大変だろうと思う。四人の奥さんのうち途中で一人が亡くなると、再婚でもしようものなら、本心に何が何だか、子供のつながりが判らなくなってしまうので、遠藤氏も紙に書いても判らないといわれている。



外国食品工場の 状況調査と指導に携って

(54)

オマーンを知ろう(2)

(技術士農業及び経営工学部門)
佐藤正忠

前号にオマーンを含めてアラブの国では四人まで夫人を持つる風情で、何せ男は強くなければいけないし、それだけ男子僥先社会であると誓いた。

確かに小さな子供でも、男女は別々に遊んでいる。男の児は街中でも道路でも遊んでいるが、女の児は余りいない。家と家の間にある広場のようなどこで遊んでいる。一度アーツ畑へ行って、細い道を歩いていたらうっつきり標識を見落として、入ってしまい吐ら

れたことがある。そこは女の洗濯場であり干場であり、また女の児の遊び場であった。しかし一方ワヒバ砂漠のベドウィン部落では男児も女児も一緒に遊んでおり、私共の車の周囲に乗って来て困ったことがあった。インド人運転手が本気で怒っていたが、何かトラブルがあったら大変なことになる。カメラを向けると女児は逃げたり、顔はかくすが、男の児は全く平気で、もっと撮ってくれと逆に催促される始末で全く難儀した思い出

がある。砂漠に入った時のドライテクニクも違う。インド人ドライバーは通常の街中のコンクリート道は実に良いが、砂漠の砂に入るとダメ。まだ技術が未熟である。これに比べると遠藤氏の本に出てくるノルウェー人は実にうまい。ホテル内のツアーガイドの紹介で、このノルウェー人の運転で砂漠(ワヒバでなくハルビ砂漠)へ行った。腕も確かだし、何と云っても砂漠中の小山を横断する時には、自ら車を降り砂

の確かさを手で確かめて、4WD車を操作する。それも三〇度位の傾斜を上ったり下ったりする。ワジの河原を行く時もやはり、水のある所から、這い上る際も、水中の岩を渡り車の上げそつな箇所をいちいち確認する。大切なお客をのせているからと言っているが、実に慎重な運転である。行ったのがラマタン中で、運転手がランチョボックスを我々人数分持参してくれて朝早く出かけたわけである。昼食は部落を離れた山の中で人に見えないように樹の下で食べる。お腹が空いていて、何でもおいしい。煙草も他人には判らないように喫つか、唇間は全く喫わなかったが、まあここで十分は喫える。英語もアラビア語も出来る彼は道でオマーン人にも話をし「こちらも彼が眠くならないよう運転中も話しかけてやる。天気も大変良

く、山へ登り、川を遡ったり、砂漠へ入ったり、一日またっぷりと楽しんだものである。一日十数時間遊び、昼食を含めて、チップも入れて一人約一万円位で非常に安いツアーであった。大体ほとんど雨の少ない地方でもあり、雨が降ると「今日はよい天気だ」というお困り。したがって排水処理が一寸不十分である。だからワジが出来て、水は自然にそこを流れる。ある所から突然地下に入り(川はそこで無くなってしまつように見える)、デーツ用の灌溉用水になったり、オアシスを形成し、そこに住む人達の生活用水になっている。それが大都市オマーンでは)のマスカット市内で十字路に水があふれて洪水になるとは及びもつかない。スークなどの人が集まるマーケットの道も水が貯まってお

り、天井からは水が漏れ落ちてくる。オマーン人は水が珍しいのか、こわくないのか平気で水の中を泳いだり、十字路でもほとんど腰まで水に浸かりながらも平気で棒やロープにつかまって渡る。まるで楽しんでる様子。本所に所変われば人の行動も考えも変わる感じがする。しかしこのスークはいつ行っても面白い。大きなスーパーマーケットが幾つもあり、食料品は大抵そこで買つが、スークでは民芸品、衣料品、日用品、骨董品、貴金属類、各種の香料や化粧品、ハーブ類などを売っている。どこへ行っても定価があるよつでない。香水などもこれが良い、あれが良いと一寸ずつ手で顔に付けてくれる。大體化粧品や香水を売っているお店にいる人は美人が多く、愛想もよい。「自分はあまで毎日取りかえてくる。生地はカシミアをベース

にワール混紡で色は赤、青、緑、黄、黒などさまざま。女性用のスカーフとして土産用にもよい。しかし非常に高い。本所に良いなと思つた物は二〇〇R(約六万円)もしたのに驚いた。セリーヌやエルメスで名高いパリでも注目される代物である。三つ目の香水について世界一高級な香水はオマーンで作られている。高いものは一瓶三〇万円もするとか。容器も金やオニックス、ラピスラズリなどの寶石で出来ている。中身も沢山の成分が混合された手の込んだものである。当然中にはオマーン特産の乳香や没薬が配合されている。これらもひやかしで店に入ると面白い。美人と話がで



外国食品工場の 状況調査と指導に携って

(55)

オマーンを知ろう(3)

(技術士農業及び経営工学部門)
佐藤正忠

イスラム教を信ずる人達にとつてラマダン期は非常に重要で且つ神聖視されている所である。彼等はイスラムの教を心に深く刻むことになる。不思議なのは重大ではあるが、開始期が明確でないことで、前に書いたように髪や爪の細心の新月を見つけて、発見者はこれを知事、裁判官あるいは月観測委員会に一報する。イスラム社会では大陰暦を採用しており、新月が現れれば新しい月が始まることになる。この時期には担当者は國

夜が逆転していると考えればよい。
役所の勤務時間も朝、午後とも短縮される。通常でも午後二時頃まで勤務の役人は一時頃仕事を終えて退所してしまう。一時過ぎといえは、また一番陽の高い時間帯なのに、彼等は本当に家へ帰って何をしているのかといふかつてしまう。私ら外国人には自由の時間が取れていよいよなものだが、美術館やスパー、デパートも全部閉まってるので時間のつぶし方がない。
ホテルでシャワーでも浴びて一休みし、資料の整理が、日本から持参した本でも読むしかすることがない。スポーツクラブはやらせてくれたが、断食明けにはかなり気温も上昇している。ラマダン最後の一〇日間の奇数日に到来するであろうカドル(定め)の夜が特に尊ばれている。通常ラマダン月の二七回目の夜とされてはいるが、実際にこの夜はいつになるのか誰にも分らない。この夜は諸々の天使、聖靈が最も地上に近づき、夜を徹しての祈りは「千の月(八三年間)の祈り」にも勝るといわれる。ムハンマドは神に祈りを捧げ、神の許しを乞うよう導き、この夜全身全霊で祈りを捧げる者は過去の罪を許される、と人々に教えている。イスラムの人々とはこの最後の一〇日間深い祈りを捧げるのだそうである。罪を許された人は当然天国に行ける。もし許されなければ、死後の世界は逆さまに用ゐられ、頭で歩かされる。目は見えず口はきけず耳も聞こえない。そして落ちゆく先はジャハナム(地獄)と決まっておりでそこで火責めに会う。こんなに天国と地獄に差があつては誰だつて一生懸命お祈りをして罪を許されたいと願うであろう。
断食明けにはイード・アル・フィットル休日がある。
イード休み前のハプタ市(いち)が全国で始まり、この休みを祝つたための晴着、履物、香水類、家庭用品、野菜や果実、ナッツや菓子、鳥、動物などの食料品、文房具類などあらゆるものが取引される。動物などもその単位が牛、山羊、羊と一匹単位と聞く。
イード休みには子供が家々を回り、その家では若干の小金を渡すのが習慣である。近くの家々でもパーティーが催される。一カ月断食したので、まず甘いもの(ハルワ)を食べ、私にいわせれば一日の断食がなければ、そんなに体力を消耗して見えない。私には見えないが、やはりそれは習慣である。もちろん國王もこのとき通りに従ひ断食を止め、大臣、顧問、政府高官、軍関係者、シエイクや一般市民と共にモスクでイード祈りを捧げる。その後宮殿(私も何回か門の前を通つたが、かなり立派でまた広い。やはり門前には小銃をかついだ衛兵が立っているが、写真を撮つても何もいわれなかった)で祝福を受けられる。その後宴会を開き、午後は一般市民によるオマーン伝統舞踊を楽しまれることもあるらしい。
カブス國王は国民にも信頼があり忠誠を誓っている。羨ましい限りである。いつ迄も続いている。
話交わつてイスラムの國では賭は法度になつてゐる。しかしラクダレースはやつてゐる。私もどこかへ行く途中、いやに早足で車と並行して走っているラクダがいるなど思つたら、なんと運



外国食品工場の 状況調査と指導に携って

(56)

オマーンを知ろう(4)

(技術士農業及び経営工学部門)
佐藤正忠

日本にも「オマーン日本友好協会」がある。私も年会費を払って加入しているが、時にオマーンの大任が来日したり、オマーン国の記念日などのハーティの御祭内を受け、年に何回かのパーティをやっている。

日本にいながらデッシュターンヤ姿のオマーン人と話がでるのは楽しい。ハンジャルもオマーン料理もなつかしい味である。

オマーンは自国では農産物にしても、さやいんげんや馬鈴薯と余り多くない。しかし近隣の海岸

諸国やヨーロッパから食品やその原料は何でも入ってくる。小麦などは遠くオーストラリアから入って来ている。後でまた書くことになつたがアラブ首長国連邦(UAE)からも野菜、加工食品、繊維、金属、機械製品がドバイ経由で入る。これがまたUAE生産でなく先進国での輸入製品であり、いわばドバイ経由の輸入となる。オマーンでもドバイにあるようなフリーゾーンが整備されれば直接に輸入されるであろうに。逆にオマーンからドバイへは魚類の輸出

品が多い。ラクダも多いという。私が水産会社で見た輸出品の包装は一応発泡スチロール箱を使用してはいるが、冷凍品保存技術が悪いためか、輸送上で解凍品が増え、ひどい場合には腐敗してしまい、痛手を負うことが多いことを聞いた。流通上の取扱いに問題があるのかもしれない。地形から見てオマーンは半分は海に沿っており魚介類は沢山獲れる。ごく海岸近くでムール貝やタコも獲れる。岩場で満ち始めている海水が岩の間を流れ込み、ぶつかってしぶ

きを上げている頃、岩に一面ムール貝がびっしり付いているのを、鉄棒で削いで袋に入れればよいとのこと。タコ獲りは、海水に上っている岩の間に一本の鉄の棒を差し込んでタコを探す。見つかったらもう一本の鉄棒にタコを絡ませて引き出す。びんびんしたタコが鉄棒に吸い付いて上って来るが、結構吸い付く力が強い。大タコの場合、喉に吸い付かれて窒息死する事故もあるという。このような獲りたての魚介類を海岸で石焼きにして食べると何ともいえない味であろう。私はついぞ、このようなパーベキューはやらなかったが、さぞやおいしいと考

えるだけで、喉が鳴り、唾がわいて来る。

同氏の本によると、オマーンで時にラクダ肉の焼き肉パーティの話も出て来る。味付けにソースを加減して料理されたらしく、歯ざわり良く、牛

肉よりうまいとの招待者の批評であった。ラクダは生後三カ月位の子ラクダも柔らかくておいしい。しかし一般に砂漠ではラクダは食べない。生活の必需品であるラクダを殺すことは自分ら砂漠の住人も死を意味することに

なる。したがって余程特別な場合でないとラクダを食べることはないらしい。因みにラクダは一頭(レース用)六、七〇〇万円するとのこと。二〇〇ccクラスの日本車が二二〇〜三三〇万、4WD車でも二〇〇万円程度で買えることから比較すると大変な金額である。

オマーン的首都マスカットの西方に唯一の総合国立大学であるサルタン・カブース大学がある。この大学には現在教育、医学、理学、工学、農学、芸術、経営の七学部がある。一九八〇年十一月に現国王の建国一〇周年を記念して設立された大学である。私どもも

この農学部や工学部へ行った。しかし農学部は食物原料の栽培や育成が主であり、私の専門である食品加工までまだ手が回らない様子。まして原料の鮮度保持は将来的課題である。今後順に記載するつもりであるが、市内にあるFAMAPという日本ではえば農協のような組織がある。この研究室にはキュウリ、トマトの規格(色やサイズ)があつた。これは荷物勿論農産物でオマーン品も外国輸入品全てを扱う集荷、選別、再出荷している場所にもかなり多くのものがあるが、やはり傷んでいるものもある。これら流通上での損傷をもっと少なくするよう研究をすればよいのにと

思ったが、この国には現在まだ消費者の要求はないようだ。

水産物の研究は水族館に隣接する海洋科学魚類センター(MSFC)で行っている。日本人の研

究者が五、六人居られアメリカ人もいるらしい。ここでは魚類のみでなく船も対象となっている。いずれこれは項を改めてお話ししたいと考えている。

また工学部の研究設備も(MCIの研究機関を訪れた際も同様)私の期待する包装材料や包装された製品を試験する機器はなかった。トン単位でコンクリートブロックを破壊する度合いを測定するものであったり、建材の引張り強度を測定するもので、プラスチックなどの包材には適用出来ない代物が多かった。包装資材の諸試験に最低必要な機器のリストはドラフト・ファイナル・レポートには記載してあるが、彼等がどこまでその必要性を理解できるかわからない。

しかしカブース大学の学生は優秀で六〇%以上が女性であると聞く。卒業後はまず国家公務員を

希望する学生が多く、民間へは余り就職しないらしい。だからこの大学が出来るまでは、オマーン人は国費で海外大学へ留学した人が多かった。今は大学院かこにない学部を学びたい学生に限られるようである。新学期は欧米と同じく九月から始まっている。かなりエリートでないと、この大学へは入学できない。

最後にオマーンの医療面での発展もめざましい。一九七〇年以前は皆無であった医療施設がその後の二四年間に建設され、いまや四八の病院、九〇の診療所が開設されている。最新式設備があるというが、幸い私はお世話にはならなかった。一方製薬会社はなく、大部分輸入品で賄う状況で、バルク扱い社社社のみである。



外国食品工場の 状況調査と指導に携って

(57)

オマーンを知ろう (5)

(技術士農業及び経営工学部門)
佐藤 正 忠

「オマーンを知ろう」シリーズは今回で終わりとし、次は訪問した企業の話をするにしよう。

アラビア半島の南東部に位置するオマーン国。UAEとは北部で接しており、けわしいハジャール山地が海岸線に沿って連なり、古くペルシャ時代に築かれたフアラージュ(灌漑)をういては私共の常宿であったのもアル・フアラージュホテルという名であったりや地下水を利用して農業が行なわれている。アラビアンナイトに出

てくる船乗りシンドバッドもソハールの港から出港したとされ、今もスール港の近くには当時の木造船もかくやと思わせる造船所があり、各主要道路の交叉点にはいろいろな遺跡を形どった造形物があるが、当時の木造船やフォルト(砦)を見ると、こんな船で海洋に漕ぎ出して、魚を獲っていたのだなあと感心する。現在も同様な船は湾の中に停泊しているのを見かける。当時のオマーンの隆盛ぶりを今も伝えている景色である。南部のサララ(首都マスカットより約千キロの距離、四折の道路標識など日本では見られない)市を中心としたドフアル地方は亜熱帯性気候で、モンスーンなど北のマスカット地域とは全く違った気候である。モンスーンの後この地方は一面緑で覆われ、花が咲き乱れる美しさである。サウジアラビアとは西側で国境を定めているがこの地域は砂漠であり空白地帯(エンパティ・コーター)となっている。

料理にしても、この国にはインド人が多く、人口の四分の一は彼等が占

めており、会社経営から工場操業までほとんど重要部分を取りしきる。したがってインド料理は随所であり、辛、激辛、私用の(?)、辛辛食事を提供してくれる。

しかしオマーン人も辛いものは苦手で、オマーン風カレーはマイルドであり、日本のカレー味に近い。現地の人には馬拉ックとかマハリと呼ぶらしい。面白いのは英語でミート・カレーとかチキン・カレーといい、インド人はアラビアン・カレーと呼んで、自国のカレーと区別している。他にどこのレストランでも出す小麦粉を溶かして薄く焼いたクルムやスレーダというパンは幾らでもお代りを出してくれ、これにカレーや野菜・肉・魚の焼いたものを付けて食べてもおいしい。イラでもナンは沢山出してくれたが、食べ方は類似している。後には前にも書いた手で食べるオマ

ン料理もおいしい。スーパーマーケットもマスケット市内にはかなりあり、値段の高いもの、安いもの何でもある。ほとんどの日用品はここで買える。私も職業柄毎日のように、違ったスーパーへ行つてショッピングを楽しんだ。本屋はそれほどないが、でもその数軒の本屋には結構技術的関連書も並んでいる。どの国へ行つても同じ方向であるが、料理に関する本は多い。面白いのは本屋で、人形なども売っている。MCIのM女性局長に紹介してもらい訪れた人形店には本屋であつた。パン屋も町中に沢山ある。よく我々の行くパン屋は奥で焼いている中規模のパン屋である。はつきりしないが、冷蔵生地くらいなものを持ち込んで焼いているらしい。このパン屋の店員が衛生状況を考慮してか、パンを握んでポリ袋に入れるのは手袋をして行

ているのは感心した。しかしその後お金を払う段になり、その手袋のまま小銭を受け取っている。何のための手袋かわからないが、とにかく食品取扱いを素手でやっていると、かんと言われているのである。この辺の不徹底さとアバウトさが面白い。

大体がインシャラー(神の恵)のままに(ブククラ明日)マール(氣にするな)の国民でこれはアラブ人全体に共有しており、時間、約束など規律にもおろか悪くいえばルーズである。MCIの役人相手でもこの感じはあり、当方は訪問相手企業とのアポを早く取って欲しいと思つても、ゆくり電話し、始め相手が出て

もアラビア語で何言つているかかわらないが挨拶をするようではない。MFCに勤務する日本人もここに分析や測定機器も教えてはいるが、

未だ彼等自身では使つてはいけない状態らしい。日本人やアメリカ人がいなくなるまで機器類はほりをかぶつて、無用の長物になつてしまつと嘆いておられた。大学でもそうらしく日本で助手といえは学生に授業や実験操作を教授に代り教える立場にあるが、この国では反対で、学生の使う予定機器の測定前の準備やメンテナンス、修理する役目の人であると聞いた。日本とは大分違つている。

このオマーンに二年前日本の皇太子夫妻が訪問され、親しく國王とも会われた写真がオマーン発行のガイドブックに載つている。

しかし飲食の習慣が男女別であるように、皇太子も別々のパーティに出席されたとか、また洋服も長く、足首までのドレス着用であつた。

外国食品工場の 状況調査と指導に携って

(51)

オマーンでの生活 (1)

(技術士農業及び経営工学部門)

佐藤 正忠

オマーンの空は抜けるような青さがある。前後三回オマーンへ行ったが、十二月、翌年の一月

案内書や長年居住されていた人の紹介書も出ている。旅行案内記では、タイアモンドビッグ社からの「地球の歩き方シリーズ」にアラビア半島編が二年位前に出た。オマーンばかりでなく周辺の湾岸諸国も出ており、大麥参考になる。なおこの本には読者が自分の経験を出せば次の改訂時にはそれが掲載される仕組みになっている。JTBの「中近東シリーズ」にはオマーンのことほほんの二頁程度しか出ていない。パーレン、イエメン、アラブ酋長国連邦(UAE)、クエートなど小国と同じ扱いである。

オマーンについては、私も関係していたオマーン商工省(MIC)の元顧問の肩書きでJICA派遣専門家として現在中東研究家を訪れている藤原晴男氏の「オマーンが見えてくる」(サイマル出版会)に詳しく書いてある。私などへの日数にして一カ月程度であるのに対して同氏は二年滞在されているので、この

国の習慣、歴史、文化、伝統、人と自然について広く書かれていて面白い本である。

私の趣味で初めての国へ行っても最低挨拶くらいはその国の言葉でやりたいのであるが、さすがアラビア語は難かしい。英仏やドイツ語とは全く違つし、大体あの右から左へみずのはったみたいな文字(失礼)は、区切りもないし全く判らない。でも朝の挨拶や有難うぐらゐは言えるようになった。ホテルで毎朝オマーンタイムズ(英文版)を部屋に入れてくれるので、これにいつも一言簡単な会話文が英語とアラビア語で書いてあり少し参考になる。ただ紙に書いてある文字はアクセントがわからないので、実用化には難がある。長期滞在すれば当然ホテルのフロントマンとも仲良く

アフリカ・ザンジバル出身のお嬢さん(オマーン人)などすぐ仲良くなれる。こちらは食品会社や香料会社に行くとサンプルを貰うことが多い。内容や包装に目新しいものがあれば別だがそれ以外は彼女にあげることが多い。この国の法律はどうなのかわからないが、フロントマンが客の日本人から物を貰っているのは良いのか悪いのか。しかし恥ずかしがりながらも彼女はいやとは言わないで手に取ってくれた。かといってその後特にサービスが良くなつた訳ではない。大体スナック菓子やポテトチップス、チョコレート、チューインガムくらいで買収できる筈はない。まあ気軽に話が出来ることくらいがメリットである。ホテルフロントに隣接して銀行が入っている。この国での銀行両替は金額の多少に拘らず同額であるので、どうせ替えるなら一度に沢山した方が歩が長い。

さらにホテルフロントより銀行窓口の方がレートが良いのでフロントマンも銀行へ行って両替して来いという。少しでも泊り客のことを思って言っているのか、商売気が少ないのか、したがってホテルへ支払う前に大抵の金額を聞き、銀行へ行って両替したオマーンリヤル札を支払うことになる。同じ湾岸諸国でありながら対米ドル換算率がかなり異なる。UAEのドバイへ行くとレートが一〇倍程度違うので換算するのに時間もかかるし、よくわからない。この銀行も開店時間が短かく、朝九時から一二時、午後は四時〜六時くらいでラマダンになるとまた短かくなる。銀行ばかりでなく役所、美術館、スーパーマーケットやレストランなど全ての店がこの国では午後は閉店する。レストランなどはたとえ午後三時頃には閉まるので困ることも多い。MICで二時頃に戻り打ち合わせ等していると二時間くらいはすぐに経つてしまふ。それからの遅い昼食になる。昼食といっても日本のように軽いものでなく、肉や魚を含めた洋食風のもの。一応米を炊いたカレーなどである。ホテルに戻りオマーン只一の日本食レストランへ行けば、そば、うどんの類も食べられるがいつもというのでは飽きが来る。といって日本のように外食では何でも食べられるのではなく、インド、中国、洋食のほとんど決まったレストランへ行くしかない。ここでインド人ボーイを相手に適宜しゃべり冗談を言っておく。いつも同行のs氏は少々辛いものは平気であるが、反対に私は辛いものに弱い汗が出る。顔全体がのぼせてくる。しかし香辛料をつま

く使っているのだから、これは良い。また少々辛いのもヨーグルト風のドレッシングがあり、これで幾分でも薄めれば食べられる。私どもの団長氏などは、かなり辛い食事

に慣れておられ、文字通りインド人もびっくりする辛さのものを口に入れる。よく平気だと思つた。香辛料の効いた食事は、殺菌にもなり、胃腸の活動を活発にするので、異国や特に暑い国々では必要である。昼食が三時では夕食は八時〜九時になる。店も六時頃にならな

いと開かない。真夜中になる程人は多くなつてくる不思議な国である。本当にアラブの人は午後何しているのだらうと感

ずりたくなつてしまふ。

何しているのだらうと感

オマーンについても旅行

の二頁程度しか出てい

ない。

この国での銀行両替は金

額

の多少に拘らず同額で

ある。

外国食品工場の 状況調査と指導に携って

(52)

オマーンでの生活 (2)

(技術士農業及び経営工学部門)

佐藤正忠

オマーンで生活している日本人はある程度いる。

オマーンでの商社関係の方々には直接当地に事務所を持つていたり、中には少なく、近隣諸国に事務所所をもち定期的に訪れる人が多い。

銀行マンも同様である。

もっともジェット機で二、三時間あれば飛来できるので、他の国から来るといつても日本での国内便みたいな感じである。

ここでいろいろ働いている日本人にお会い

とも気軽に話ができたのは大変有難いことであつた。

因みにお食事は和洋の折衷的なものが多かったが、新鮮な魚あり(オマーンは東側がほとんど海でありインド洋も近く漁獲は盛んである)、肉ありで美味なものである。シェフはインド人らしく、サーブするのにもインド人である。食堂に入る際、各人の座る位置があらかじめ決まっておりにこれが英文で書いてある。

私などいつもローマ字であるところ、同文字になつてしまふ同姓の人がいて、私はどちらと聞かねばならなかつた。テーブルにつくと柄の紋章入りのプレートに名が書かれていた。外国人相手の食事が多いらしく私も一般庶民には初体験のことである。食前、食中、食後の飲み物も当然一人

ひとり注文を聞かれ、大体その注文とおりのものが出される。しかしこれが不特定多数の人々が来る、たとえば日本の記念日になると大違いである。大使館の広い庭を全部開放し、庭のあちこちやプールサイドに模擬店を作り、日本の寿司や焼鳥、当地の肉の串刺しなどいろいろなものも並べられる。酒類もワイエターに頼めば大体何でも持つて来てはくれるが、屋外パーティだけにあまり難しいカクテルはなく、ビール、ウイスキー、ワイン等単品が多い。アラブの人は面白く煙草を吸う人、酒を飲む人、肉を喰う人がいるかと思えば全くアルコール類を飲まず、ジュースやコーラを飲む人、煙草もまみちである。これらの全く見知らぬ人たちが酒を飲みながら話するのは楽しいものである。

当方は平服(二応ネクタイはしめて)姿であるが、オマーンの人達には普通オマーン男性が身につける衣装のデッシュターシャ(白が多いが、他にも青、紫、暗色など色柄も多く、襟元に房が付いていて、この房に香水やコロンを染み込ませている)を着て、上にガウンのようなものを着て腰にハンジャル(短剣)を差している。酒を飲みながらも目の前に短剣があり、これがベルトにただはさんでいるだけであり、何となく不安。こちらの言い方で機嫌を損ねたりして抜かれたらなど思つといささか気持は良くない。オマーン人は大体おとなしく、出しゃばらないことが美德の一つとされているもの、アルコールが体内に入れば人間の心などすぐ変わってしまうのではないだろうか。しかし感心するの

は、そういった席での彼等同士の挨拶の長さである。普段でも我々に対してはオマーン人達は気持ちよく挨拶を交わしてくれる。全員に対して一人ずつ必ず挨拶する。手が届かなければ(テーブルやカウンターなど障害物があつて)口だけでも出す。これは大人ばかりでなく子供も同じである。これもしつけの問題であろう。アラブの人達同士の挨拶は普通に握手して五分間くらい手を握つたまま何のかと話している。最初に疑だらけのほの両側で抱きかかえるようにすり合わせる。私もやられた(？)ことがあるが、疑がじゃりじゃりして気持の良いものではない。長い挨拶の後やと飲みものや食べ物さほうはりつつ話をすすめる。実に楽しそうな風景があちこちでくり返されている。彼等の着ている

デッシュターシャの下にはほとんど何も着ていない。十二月の天皇誕生日の祝い(多分早めて中旬であつた)の時は夜九時過ぎるとやや肌寒さを感じたが、彼等はいたつて平気。ある人などわざわざオレはこれ一枚とボタンをはずして、たかましい胸毛を「れ見よがしに見せてくれる。男性の裸など見たこともないが仕方なし。

履き物にしても、これは王様から下々までオマーンではスリッパみたいなサンダルで靴下もはいてない。だから少女の水たまりでも、たまに降る雨の中でも平気。靴だと水たまりをよけるとか面倒であるが、あたり構わず歩いている。このサンダルは皮製で、結構高い。全般に皮製品も貴金属も安いのに比べるとサンダル価格は高いように思われた。

話が続いていた。食品や包装は通常誰かが最も身近に関係しており、ほとんど毎日接しているものでありながら、その興行きの深さはあまり知られてはいない。そのため誰もが口にするものが出来、平均的な公平な分野ではなからうかと考え

る。食い物の恨みは怖いとはよく言われるが、「この食べ物ほうまい」、「オレはこんな料理なら自分で作れる」なんていう自慢話なら誰が相手でもよく話が合うので楽しいものである。こんな訳で大使や夫人